



保健管理センター精神科における18年間を ふりかえって

堀 正士 (保健管理センター 臨床医学系 准教授)

私が保健センター精神科において学生の診療にあたるようになり、18年目になります。着任当初の年間延べ受診者数は約1,400人でしたが、昨年度は二倍超の2,950人まで増加し、おそらく今年度は3,000人を越えるのではないかと予想されます。一方で診療担当スタッフ数は着任当初と変わらないため、当時は一人一人にじっくりと時間をかけて診療が出来たのに、現在はそれが出来にくくなっています。ところで、この間の受診学生の臨床像はどのように変わったのでしょうか。これまで私はこのコーナーや紫峰会報のコラムに、その時々を感じていることを書いてきました。今回はそれらを今一度おさらいしてみたいと思います。

1. 目立たなくなった「五月病」とモラトリアム

新入生に五月によく見られた不適應はだんだん少なくなっています。この背景は青年期、つまり社会人として独り立ちする直前の段階がどんどん延長し、その終了時期が後退あるいは不鮮明化していることによると思われます。かつてモラトリアム (猶予) という言葉がよく大学生との会話の話題に上っていましたが、期限の切られていない現代の青年期においては、それも死語になった感があります。「将来どうしたいか」「どんな職業に就いたらいいのか」といった悩みは随分少なくなり、現代の青年の悩みはもっぱら人間関係が中心です。

2. 不安耐性の低下と衝動性

「試験の点数がとれたか」「ゼミの発表がうまくいくか」などといった出来事の直前によく起こる不安は、自信のなさの裏返しです。これを克服しようと思えば、自ら人一倍勉強をし経験を積むことが大切になります。つまり、不安を乗り越えていくことで人格的に成長するのが人間です。しかし最近の青年は、乗り越えるべき不安を前に怖じ気づくことも、また不安を身体化することもなく、一気に過食、リストカッ

ト、引きこもりなどの行動に出てしまう傾向が強まっています。このような行為で不安は回避されるのですが、結果として人格の成長が停滞してしまうことが懸念されます。

3. 「うつ」の増加と疾病同一性

最近、精神科クリニックにおけるうつ病の増加が指摘されています。現在抗うつ薬の売り上げは年間1,000億円を優に超え、これは10年前の約10倍にあたります。しかしうつ病の患者さんの中心は今や中高年ではなく、20～30代の青年に移ってきています。彼らの訴えは、私が教科書で学んだうつ病と症状は似ているのですが、周囲の人間に対する対応が全く異なります。すなわち、「自分は『うつ病』だから勉強や研究に集中できない」と訴え、「自分は『うつ病』なのに周囲が怠けだといって理解を示さない」と周囲を批判するといった態度をとる者が多く見られます。「うつ病」というスタンスをとることで、現実の不安を回避している自分、あるいは適應できない自分を惨めな立場におかないようにしているのではないのでしょうか。

ひょっとすると、私自身赴任当初はまだ若かったのが今やりっぱなオジさんになってしまい、「父親的なスタンス」で学生を診るようになったのが、これらのような変化を感じる理由かもしれません。ともあれ、こういった青年期の変化は「だから今の若いは・・・」と切って捨ててしまえる問題ではありません。彼らは現実に適應しようとした結果、こういった変化を余儀なくされているわけですから。その原因を見つけようとするれば、視点を養育や教育といった彼らを取り巻く社会全体に移していかなければなりません。一精神科医として今後どのようにコミットするべきか、真剣に悩む今日この頃です。



ひとりで悩まず 保健管理センターへ

保健管理センター受付 029(853)2410

学生相談室受付 029(853)2415